

仏教語に由来する和製漢語

—「観念」「観想」「想念」の語誌的考察について

文芸学研究科 趙翊彤

指導教員 茗荷 円准教授

要約 本稿は、仏教語に由来する「観念」「観想」「想念」の三語を対象とし、日本語における語義変化と一般語彙化の過程を考察した。また、このような和製漢語は日本語で再定義された後に中国語への逆輸出についても考察を行った。

キーワード 仏教語 和製漢語 意味拡張

一 はじめに

近代以降、とりわけ 19 世紀後半に入ると、西洋の思想・制度を受容する過程において、それらの概念を漢語によって翻訳するための和製漢語が数多く創出された。これらは、漢語の既存の造語法に基づいて新たに形成された新造語にとどまらず、古くから存在していた漢語に新たな意味内容を付与し、意味の転用や再解釈を通じて再生されたものも少なくない。中国で漢字と発音によって翻訳された仏教語がまた、このような過程を経て和製漢語の一部となった。角岡（2003）が指摘するように、仏教用語は近代にいたるまで日本思想体系の根幹の一部を形成してきた¹。

郭（2025）では、「観点」などの語について、仏教的意味から一般的な意味へと移行した²と簡単に指摘されているが、その具体的な変遷過程については十分に考察されていない。そこで本稿では、いずれも仏教語に由来し、かつ類義関係にある和製漢語「観念」「観想」「想念」の三語を研究対象とする。これら三語を取り上げることにより、時代の推移に伴う三つの語の意味的变化を明らかにしたい。そして、これらが日本語語彙として定着していく過程と中国語への逆輸出に着目する。

二 サンスクリット語から日本語へ

日本仏教文献には、「善也不思量なり、悪也不思量なり、心意識にあらず、念想観にあらず、作仏を図することなかれ」（『正法眼蔵』「三昧王三昧」〔1231–1253〕）という一節が見られる。

『日本国語大辞典』によれば、「念想観」とは「仏語。念と想と観。念は憶念すること、想は表象・知覚すること、観は智慧をもって観察思惟すること」と説明されている。さら

¹ 角岡賢一. 一般語彙として流通する仏教用語の考察. 龍谷紀要= The Ryukoku journal of humanities and sciences. 龍谷大学龍谷紀要編集委員会編. 25(1) 2003.9, p.17~35.

² 郭桐琳. 「仏教語彙の日本古典文学資料による意味変化-二字漢字を中心に-」. 国際文化研究 29, 龍谷大学国際文化学会. 2025.03

に仏教用語用例集³によれば、「想」はサンスクリット語 *saṃjñā* (संज्ञा) に対応し、「表象」「想念」などの意味を持つ。一方、「念」はサンスクリット語 *smṛti* (स्मृति) に対応し、「記憶」「憶念」の意味を表す語である。

梵漢対照語彙表⁴を参照した結果、「念」および「想」に対応するサンスクリット語は、中国語と日本語のいずれにおいても共通しており、それぞれ同一の語源に基づいていることが確認された。また、「観」に対応するサンスクリット語は *vibhū* (विभू) であり、その語義も『日本国語大辞典』に示される説明と一致することが明らかとなった。

しかし、ここで用いられている「念想観」は、「念」「想」「観」という三つの漢字から構成される語であるが、その概念自体はサンスクリット語の概念を直接翻訳したものではなく、日本において独自に形成された造語であると考えられる。「念」「想」「観」という単字が中国語訳仏典に由来することは確認できるが、「観念」「想念」「観想」といった複合語については、サンスクリット語辞書に対応する項目が見出されない。したがって、大地コーパス⁵の調査によって、これら三語はいずれも日本語資料に先立って中国古典文献の中に用例を有することが明らかになったが、それらが日本における造語であるのか、あるいは中訳仏典を経由して日本語へと移入された語であるのかについては、現時点では断定することはできない。以下の1)～3)は、大地語料庫において、「観念」「観想」「想念」の三語がそれぞれ確認できる最古の用例である。

- 1) 【中】此是犬薩埵観念心。(『金剛頂經』, 753)
【日】林下暗堂卧聴磬, 禪心観念法皆空。(『經國集』卷第十, 827 頃)
- 2) 【中】此想成已, 名爲粗見極樂世界寶樹、寶地、寶池, 是爲観想, 名第六觀。『佛說觀無量壽佛經』442)
【日】古来の仏祖、いたづらに一日の功夫をつひやさざる儀、よのつねに観想すべし。(『正法眼蔵』行持・上, 1231～1253)
- 3) 【中】設我得佛, 國中天人若起想念, 貪計身者, 不取正覺。(『佛說無量壽經卷』, 421)
【日】本心をあらはす想念の所作は、皆無義也。(『貞享版沙石集』三・八, 1283)

三 仏教語から和製漢語へ

「観念」「観想」「想念」は、いずれも最初から仏教語とする語彙であるが、日本の近代化の進展とともにその用法と意味領域を拡張し、次第に仏教の文脈を離れて一般語彙とし

³ 仏教用語の用例集. https://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/html/index_75dharma.html. (参照 2026-01-04)

⁴ 梵佛词典. <https://dict.fanfoyan.com>. (参照 2026-01-04)

⁵ 「大地コーパス」は、中国国家社会科学基金プロジェクト「日本漢字語コーパスの構築と研究」の支援を受けて構築された、中日古代文献コーパスである。大地コーパスは古籍善本を底本とし、中国および日本の各歴史時期にわたる、文学・思想・法律・歴史・科学技術など多分野の資料を収録し、その総語量は一千万字を超える。

て定着していった語である。

まず「観念」は、『日本国語大辞典』によれば、もともと「心静かに智慧によって一切を観察すること。また一般に、物事を深く考えること」を意味する仏教語である。その語義の示す通りに、「観念」の語構造は「観（ず）＋念（ず）」であり、動作性を備えた表現であった。しかし、中世以降には「覚悟する」「あきらめる」といった心理的態度を表す語として世俗化し、さらに近代に入って、例4)に示されるように、西周によって英語*idea*の訳語として採用されることで、哲学上の新しい意味（「哲学で、何かを意識したり、考えたりしたときに、意識のうちにあらわれる内容。人間の意識内容として与えられているあらゆる対象。」）を持つようになり、「哲学字彙」に哲学的概念語として再定義され、定着した。すなわち、「観念」は、「観察し、思惟する」という具体的な行為を表す語義から離れて、抽象的な「意識内容」そのものを指す語になった。「意識」の意味を表す「観念」を含む用例は、例5)に示すとおりである。

- 4) **観念**の字は仏語に出づ、今此書には英のアイデア、仏のイデーなる語を訳す。(西周『生性発蘊』, 1873)
- 5) 然るに彼等人間は毫も此**観念**がないと見えて…(夏目漱石『吾輩は猫である』, 1905-1906)

これに対して「観想」は、仏教においては「ある特定の事物に心を専注して、迷情を除こうとする修行」を指したが、その宗教的性格を長く保持していない。近代以降、西洋哲学におけるギリシア語*theōria*やラテン語*contemplatio*と対応されて、「実利実益をはなれた純粋な知的態度。経験を超えた存在と真理をとらえようとする考察」を意味する哲学用語として再解釈されるに至った。もっとも、動詞*theōrein* (to contemplate) のは「見ること、眺めること」を意味する。その語源である*theatron* (劇場)からも窺えるように、「観る」という視覚的行為に基づくものであった⁶。そして、例6)に示されるように、現代語義である「一定の対象を観察し、それについて一心に思いをこらすこと」においても、「観察する」という過程が強調される。

- 6) 自然の眺に、人事の比喻に、詩人が想像と**観想**とを彩るは雲なり。(島崎藤村『落梅集』, 1901)

一方「想念」は、仏教語としては「無念」と対照される「有念」、すなわち執着を伴う心理活動を指し、否定的評価を帯びた。近代になると、「想念」は英語 *thought* (例7のとおり) やドイツ語 *Idee* といった思想を表す概念の訳語として用いられたが、これらの概念に対してより適切かつ専門的な訳語が整備されていくにつれ、「想念」は次第にその役

⁶ 中島文雄著. 英語学研究室, 研究社出版, 1956, (研究社選書), 10.11501/2479101.

割を担わなくなり、翻訳語としては定着しなかったと考えられる。しかし、「想念」は次第に仏教に関する否定的な評価から離れ、「心に思い浮かべること」「心中の思い」「追想や回想」といった中性的な心理用語として一般化し、さらに情緒的用法を伴う日常語として定着していった。その意味を表す「想念」の例文は8)の示すとおりである。

- 7) 故に年長ずるの後或は汚穢なる想念に陥り... (...or the indulgence of an impure thought?) (中村正直訳『西国立志編』, 1870-1871)
- 8) 久しぶりのその句は、私の想念をしきりに幼時の思ひ出へと駆り立てた。(渋沢秀雄『通学物語』, 1941)

このように見ると、「観念」「観想」「想念」はいずれも最初が仏教語としながら、日本語において同一の方向に進化したのではなく、それぞれが異なる意味領域へと分化していったことが分かる。三つの語はもとの形が借用されたにとどまらず、新たな意味内容を付与されることによって、和製漢語として成立したものといえる。

四 中国語への逆輸出

多くの和製漢語が形成された後、近代以降それらの一部は中国語へと「逆輸出」される形で流入したことが知られている。「観想」は現代中国語において一般語としては定着していないが、日本語と同形する「観念(觀念)」および「想念」は現在の中国語においても一般語として用いられている。『申報』の記述からは、「観念」が日本において新たな意味を付与されたのち、中国へと再移入された語彙であることが確認できる。「観念」は中国においても近代哲学語彙の一つとして受容され、「抽象的な意識内容」や「思考の対象」といった意味で用いられるようになったのである。具体的な内容を例9)に示す。

- 9) 近日少年習氣，每喜於文字間襲用外國名詞諺語，…又如報告、困難、配當、觀念等字，意雖可解…(『申報』, 1840)

一方、「想念」については、日本語と中国語の間に意味的差異が認められる。「中国哲学書電子化計画」などのデータベースを参照すると、以下の例10)に示すとおり、「想念」は仏教語としての用法にとどまらず、「ある人物が不在であることを思い続け、寂しさを感じる」といった感情的意味は、宋代以来継続的に用いられてきたことが知られる。

- 10) 說道、怎地得恩人相會一面也好、想念如何能覓得見…(『水滸傳』, 1370)

すなわち、中国語の「想念」は、情感的持続性を強く伴う語である点に特徴がある。これに対して、日本語の「想念」は、「心に浮かぶ思い」といった一時的・瞬間的な意味合いを持つ場合が多い。この差異は、日本語の「想念」が仏教語の影響を受け、「念」が本来有していた「きわめて短い時間単位」「刹那」といった意味要素を部分的に含めている

ことに起因すると考えられる。一方、中国語の「想念」は、仏教語としての体系的影響を受けず、漢語固有の造語法に基づいて、「想（思う）」と「念（心に留める）」という類義的心理動詞を複合しており、「誰かのことを思い続ける」という持続的感情状態を表す語として用いられてきたと解釈できる。

さらに、例 11) に示されるように、中国語の「想念」における「念」は、「心に留める」「思い続ける」という意味に加えて、「口に出して言う」といった発話的側面をも含めている。これに対し、例 12) から分かるように、日本語の「想念」はむしろ「口で誦する」といった口頭実践と対照されて、「声に出さずに心中で思惟すること」、すなわち内面的・沈黙的な思考作用を強く指示する傾向が認められる。

11) 我在家，時時刻刻，那一回不想念你幾句？（『红楼梦』，1780）

12) 偈やなんども、口で誦するよりは、想念するが殊勝なぞ。〈略〉想念するは、ちっとも余念がありてはせられぬほどにぞ。（『百丈清規抄』三，1462）

五 おわりに

本稿では、三つの仏教語に由来する和製漢語「観念」「観想」「想念」を研究対象とし、語誌の角度から日本語において一般語彙化していった過程を考察した。その結果、同じ仏教語由来でありながら、語義の定着に大きな差異が生じたことを明らかにした。「観念」は、当初の「観察し思惟する」という具体的な行為を表す意味から転じて、近代以降には抽象的な哲学概念 *idea* を訳す語へと発展した。一方、「観想」は、仏教における修行としての用法を基盤としつつ、次第に仏教の文脈を離れ、対象を観察し思索するという思惟行動一般を表す語へと拡張した。これらに対して「想念」は、近代において西洋哲学の概念語と対応づけられることはなく、主として心理的な思いを表す一般語として定着した。また、「観念」は日本語で再定義された後に中国語へ逆輸出されたのに対し、中国語「想念」は借用語ではなく、独自に発展してきた語であることを指摘した。

もともと、これら三語が中訳仏典を通じて日本に伝来したのか、あるいは日本で造語されたのかについては、さらなる文献調査と用例の考察が必要である。また、同じ仏教語を起点としながら、なぜ語義の展開方向がこれほど異なったのかについても、社会的背景を含めたさらなる検討が今後の課題として残されている。

参考文献

- [1] 角岡賢一. 「一般語彙として流通する仏教用語の考察」. 龍谷紀要= The Ryukoku journal of humanities and sciences. 龍谷大学龍谷紀要編集委員会編. 25(1) 2003.9, p.17 ~ 35.
- [2] 大地コーパス. <http://www.xn--cesp9b.net/>. (参照 2026-01-04)
- [3] 郭桐琳. 「仏教語彙の日本古典文学資料による意味変化-二字漢字を中心に-」. 国際文化研究 29, 龍谷大学国際文化学会. 2025.03
- [4] 日本国語大辞典第二版編集委員会, 小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』第 1 巻, 小学館, 2000.12.
- [5] 梵佛词典. <https://dict.fanfoyan.com>. (参照 2026-01-04)
- [6] 仏教用語の用例集. https://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/html/index_75dharma.html. (参照 2026-01-04)